

Title	歐米に齎された日本出土の古鏡
Sub Title	
Author	梅原, 末治(Umehara, Sueji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.1 (1930. 3) ,p.27- 38
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歐米に齎された日本出土の古鏡

一

海外に流出した本邦古墳の出土鏡として從來知られてゐるものには、アメリカのボストン博物館所蔵の仁徳天皇陵出土と傳ふる青蓋四靈三瑞鏡があつて、それが最も著明な實例であると共に、他方獨逸柏林の土俗博物館に藏する近江國富波古墳發見の王氏作四神四獸鏡もまた、それが東京帝室博物館から贈つた遺品である關係から夙に注意に上つてゐるである。いま私の歐米各地の博物館や收藏家の實際に就いて觀た處に依るに、海外に齎された我が古墳出土の鏡は、其の數に於いては固より支那出土鏡には遙かに及ばないが、而も相當な數に上るのであつて、うちに含まれた重要な遺品の如きもまた如上の二者に限られてゐない。「佛教美術」第十四號「歐米で觀た佛像を表はした三面の古鏡」中に載せた柏林土俗博物館所蔵の大形半圓方形帶四佛四獸鏡の如きは其の一例であるが、亞米利加で觀た三面の大形神獸鏡の

如きも同じ類としてその有する銘文から吾々に興味の多いもののであつた。でこゝに先づ私の觀た歐米博物館其他に於ける日本出土古鏡の所在を錄して、海外に於ける日本關係資料紹介の一端に供すると共に、後半其の主要な遺品に就いてやゝ詳しい記載を試みまた鄙見を記することにする。

一

歐洲に於ける博物館と云へば何人も先づ指を倫敦の大英博物館と巴里のルーブル博物館とに屈するであらう、で私の記述も先づそれからはじめることにしたい。さてルーブル博物館の東洋部では支那古鏡にペリヨ教授の蒐集品其の他にやゝ觀る可き類を含んでゐるのであるが、本題の日本出土鏡に至つては遂に其の一例をも見出し得なかつた。これに比すると大英博物館は支那鏡ではわづかに一面の海獸葡萄鏡の大形で鑄上りがよくやゝ引き立つて見ゆるに過ぎないとは違つて、本邦出土鏡に四面の著しい遺品を藏してゐるのが注意せられた。是等は孰れも銹化して美しい青綠色を呈し、種々の點から仿製鏡と認められる類であつて、二面は大形の三神三獸々帶鏡に屬してゐる。出土地の詳細はいま明でないが、同館の此の日本部を飾る多くの遺品と共に故ガウランド教授の蒐集品と云ふから何れは畿内の古塚から見出されたものであらう。同じ倫敦で大英博物館と對立して重要な位置を占むるビクトリア及アルバード

博物館また日本關係の遺品が相當に豊富であつて、こゝで私は和鏡の優れた遺品——鎌倉時代のもの數面を手拓するの幸を持つたが、同時にまた徑七寸を超ゆる大形三神三獸々帶鏡(仿製品)の收藏せられてゐるのを觀て、此の種の遺品の數の多いことに考へ及んだ次第であつた。

佛蘭西の巴里では既記のルーブルの外に東洋博物館としてギマー、セルヌシイの兩博物館などがある。で私は兩者に資料のある可きを豫想したのであつたが、後者に於いて徑六寸に近い方格規矩鏡一面が其の手法から本邦鏡作部の手になつたと推し得るもの、而して出土後傳世したと思はれる遺品を見出したに過ぎなかつた。その點からすると歐洲では獨逸の東洋博物館が一番遺品が多いと云つてよく、是は主としてフィッシャー、キュンメル等同地に於ける東洋學者の日本に對する特殊な關心に負ふ處のものである。先づこれを伯林の土俗博物館に就て觀るに、同館にはベルツ博士蒐集品を主とする日本考古學の豊富な資料と共に東京帝室博物館から交換に依つて得た上代遺物があつて、前者に既記の徑一尺一寸を超ゆる大きな四佛四獸鏡があり、又後者には富波古墳出土鏡の外に播磨白國發見の內行花紋鏡を存して、海外に於ける出土地の明な實例を示してゐる。此の博物館に隣つてゐるキュンメル教授主裁の國立博物館の東洋部には、其の陳列品に大形二面と小形二面の神獸鏡系の仿製品が見受けられ、また保藏品には青綠の色澤の掬す可き變形半圓方形帶神獸鏡一面などがある。これ等は同館に於ける藤原時代の優美な和鏡數面の收藏と共にキュンメル教授の日本趣味の豊かさを物語るものに外ならぬ。獨逸には右の伯林

の外にケルンとハンブルグとに規模の大きな東洋關係の博物館があつて後者には我が原震吉氏が其の陳列の局に當つてゐる。尤も私は種々の事情で同館を訪ふ機會を失つたのであるがケルンの東洋博物館では所藏の支那鏡と高麗鏡とのみが目立つて遂に日本出土鏡を見出さなかつた。

如上の歐洲の諸博物館に對立するものを亞米利加に求めるとして何人も先づ指をボストンの博物館に屈することに異議なからう。同博物館に於ける東洋美術の富は世界に冠たるもの、古鏡鑑の如きまた總數二百面を超へて日本以外に於ける最大のコレクションをなして居り、其の日本古墳出土鏡に傳仁德天皇陵出土の鏡を含んでゐるのは初に記した如くであるが、同じ類としてなほ舉ぐ可きものに尙方作人物畫象鏡一面がある。此の鏡はロッス博士の日本で購入寄贈したものであつて、河内郡川、山城飯岡、若狭瓜生村西塚等から見出された遺品と全然同一形式に屬し、蒲鉾形に近い銘帶に、

尙方作竟自有紀。辟去不羊宜古市。上有東王父西王母。令君陽遂孫子兮

の銘のある支那鑄造鏡なのである。

紐育にあるメトロポリタン博物館また其の所藏鏡に一二の本邦出土品と覺しきものを含むが、前者に對抗する重要な資料のあるのは華府のフリヤ美術館である。本美術館の寄附者たる故フリヤ翁が日本の美術に特殊の愛着を持つてゐた紳士なのは周知の事實であるから、其の蒐集品が中心をなしてゐる本館に日本關係の古鏡の多いことは自ら首肯せられやう。現在同館所藏の古鏡は支那出土品を通じて七十面

あまりあるが中で日本出土品約十面を數へ、大きな鏡が五面あつて、そのうちの四面が日本古墳に最も多く見出される所謂三角縁の神獸鏡の形式に屬し、うちに「新出竟」なる銘のあるものや、「銅出徐州」の銘を見る點が興味を惹くのである。これに就いては次節に詳述しやう。

以上博物館の收藏品の外に亞米利加にあつては收藏家のうちに日本出土鏡の愛好者を見出す事を擧ぐ可きである。紐育のホイット氏は其の一人であつて、小形の色澤の美しい仿製神獸鏡を所藏してゐるが、スフリングフィルド市にはピッドウェイル氏があつて、徑八寸に近い徐州神獸鏡を珍藏すると共に、完好な變形方格規矩鏡や、變形半圓方形帶神獸鏡等の仿製の佳品を藏して、少數乍ら日本出土鏡の一斑を窺ひ得るものゝあるのは特記に値するのである。

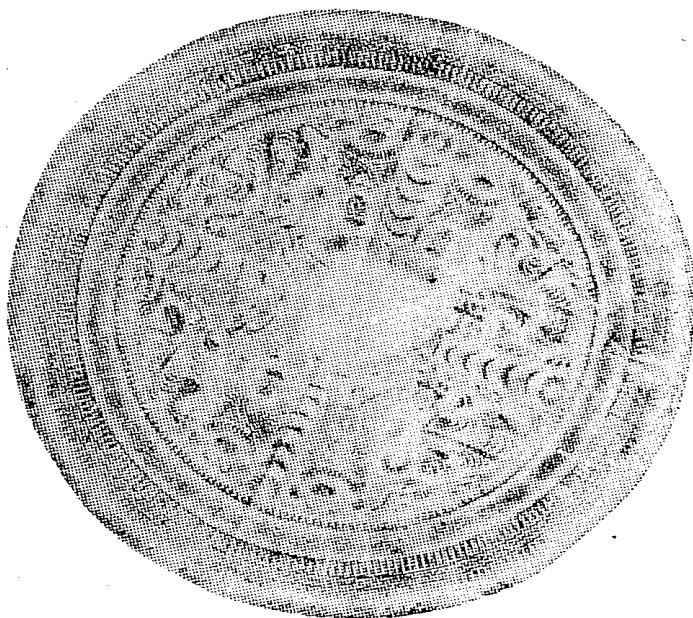
三

さて以上略記した私の歐米で觀た日本出土鏡の著しいのがやはり大形の神獸鏡の類であることは、それが内地に保藏せられてゐるものとの上に見る處と異ならない。而して此の類に支那舶載品とそれを仿した我が上代鏡作部の作品との二類の存することまた軌を一にしてゐる。このうち仿製品の例が英獨の博物館にあることは既に記したが、米のフリヤ博物館にもまた一面を藏する。然し孰れも同一の構圖なり

手法に屬して取り立てゝ云ふ程の點はない。でこゝに紹介を要するのは其の支那舶載品であつて、特にアメリカにある三面なのである。此の類として先づ舉ぐ可きはビッドウイル氏の藏鏡の一である。

右の鏡は徑八寸六分(縁厚三分五厘面の反り三分弱)に近い大形品であつて、出土の際鉛を缺き、一部分にまた缺失を見

(圖) 第一



るが、いま別個の鉛を充填し、自餘を鉛で以て補つて完形をなして居り、其の内區は幸に完存、重要な部分の特質を明にするこの出来るもの。即ち第一圖の拓影に明な如く所謂三角縁の徐州神獸鏡の代表的な遺品で、内區は四乳の間に一双の神像と怪獸形とが、笠松形圖を挟んで交互に配布せられ、其の周圍の銘帶に

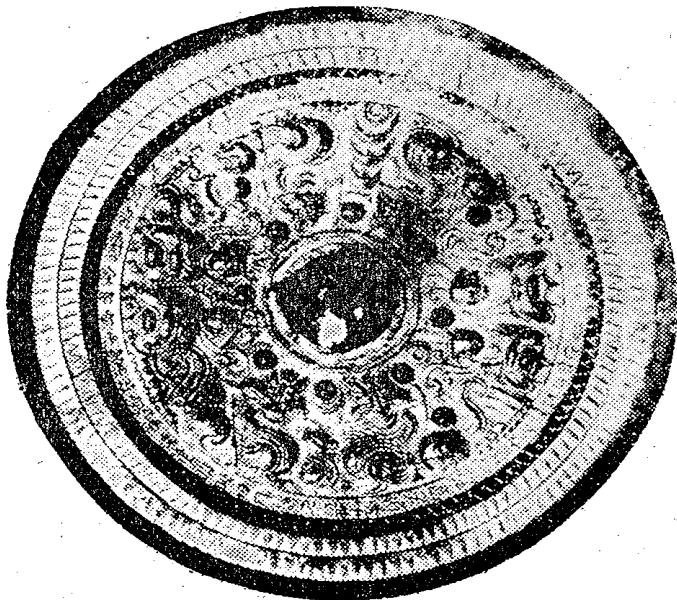
新作大竟、幽律三剛、配德君子、清而明、銅出徐州、
師出洛陽、周文刻鏤、自作文章、左龍右虎、師子有名、取者大吉、宜子孫、

の顯著な銘を持つてゐる。鑄上りは大體中等位で、色澤は鏡背の一部分に白光の本來の質をとどめてゐるが、大半は綠鏽に覆はれ、面の方には蝦蟆斑鏽が生じ鉛黒色を呈した部分を伴つてゐる。

本遺品は昨年初紐育のクレイキヤンプの店からビ氏の手に入つたものであるが、古くアメリカに齋さ

れたものと覺しく、表に「龍虎四神鑑」なる墨書の題名のある桐箱に收めてゐて、上述の其の鏽色と相俟つて日本古墳の出土品なのを明示してゐるが、出土地の詳細に就いては、傳へを缺いてゐる。鉢の闕けた工合などは一見、出土後行方を失つた山城國乙訓郡向日町字北山古墳の同式鏡に似てゐるので、或はそれではないかと思つたが、兩者は其の大きさに一寸の相違があり、また銘文に一致を缺くので、やはり全く傳へを失つた別個の遺品とするの外はない。此の種の鏡が我が古墳から數個を發見して、其の初の句から故高橋博士に依つて王葬代の鑄造と推定せられたのは學界に周知の事實である。從來の發見例に比すると、本例は其の銘と形式とに於いて大和佐味田寶塚出土鏡に同じく、大きさでは但馬森尾古墳發見品と略ぼ似て、最も大きな遺品なのである。

次にフリヤ美術館所藏鏡中の同じ類では第二、第三の兩圖に載せた二面が注意に値しやう。これは前項にも一寸記した如く、一は新出竟の句ではじまり、他は銅出徐州の銘を持つ點から、前者と密接な關係に立つ處の遺品なのである。新出竟の銘ある鏡は面徑七寸九分を測る完好なもので、鉢の周圍に有節重弧文圈があり、内區は十二個の素乳の間



(圖) 第二
二

に肉刻りの手法から成る神獸を配して、外縁の所謂三角縁をなすところ、此の種神獸鏡の特徴を具備してゐる。其の内外兩區の間にある銘帶の銘辭は、左行で鑄缺けと、鏽との爲に解讀し得ない部分を持つが、大體は次の様で、これは從來まだ其の例がない。

亲出竟。右文章。明如日月昭天梁。長保子宜孫。富如天^位至三公。□侯王。左龍右虎辟非羊。朱鳥

玄武^口彭。元^口老受王父母。■^圖者長生。買者受金石。竟^口

初の亲は云ふまでもなく新で、これは「新たに出づるの竟」と讀む可きものであらう。書體奇古、前者と

はやゝ趣を異にしてゐる。本鏡背は一部分に綠鏽を見るが、半ば漆黒の美しい色澤をして質の佳良な白銅から成つてゐるのを示し、鑄上りまたよく三角縁神獸鏡としては上作のうちに數へらる可きものである。たゞ出土地の明ならぬのは遺憾であるが致し方がない。

第三圖に示す他の一面の鏡は徑七寸三分、面に三分の反りを持つたもの、其の鏡背面は鑄口と覺しき部分にやゝ型流れのある外、文様の表現に於ては上記の一鏡よりも更に銳利であり、鉛黒の光澤ある所謂水銀銅の古色に綠鏽と朱

(圖三第)



とを點じて色彩の美をも兼ねた遺品である。而して其の構圖は主要部たる内區では四乳の間に神獸各一個宛を配した式に屬し、其の幅が割合に狭く、外區鋸齒文帶の間に複線波文を容れて同部はやゝ擴大を示してゐる。銘辭は同じく左行に繞つて

王氏作竟甚大明。同出徐州刻鏤成。師子辟邪嬌其嬰。仙人執節坐中庭。取者大吉樂未央。
と明確に表はされてある。此の銘はいま獨逸伯林の土俗博物館にある上記の近江富波古鏡出土の一鏡と略ぼ同じである上に大きさも一致してゐるが、彼の表現の朦朧なのは全く趣を異にした所謂一番型の佳品と云ふ可きものなのである。

右の三面の鏡は其の内區の神獸の配置並に表現の手法の細部などに於いては必ずしも同一でないが、第一の遺品は新作大竟の句ではじまる銘を有し、また第三は王氏作竟、銅出徐州の銘のある故高橋博士の所謂王莽鏡の範疇に入るべきものであり、第二の遺品また新出竟とあるから同じ類を見てよい。さて是等の鏡は果して一部學者の云ふ如く王莽代の製作を見るべき類であらうか。これに就いては大正八年に其の説の表はれた當時、私はそれ自體に同代の製作と断ず可き證佐のないことを開陳したことであるし(拙稿「所謂王莽鏡に就いての疑問」考古學雜誌第十卷第三號所載參照)其の後、漢代の遺跡たる樂浪の出土品に同じ類例のない點や(同「北朝鮮發見の古鏡」東洋學報第十四年第三號所載參照)また王莽の地名の改稱が當時實際に行はれた例證を漆器の銘に見出したことから、銘文中に洛陽なる地名のある遺品を

玉葬代とすることの妥當性の減じたこと、更に漸次究明の域に達した古鏡鑑沿革の大勢の上からして同説を支持し難く、で結局それを三國の魏を中心とした時代の作品とする故富岡先生の最初の見解の誤らざるを『史林』(第十二卷第一號)誌上に説いたことであつた。それ等に就いては當初私の見解を反駁せられた後藤守一君もいまでは大體是認せられてゐる様であるから、こゝに改めて説くことを差し控へやう。たゞ此の新三例の紹介に當つて序に記したいのは、第一の例に於いて、吾々が其の銘の初の新を副詞を見て「新たに大竟を作る」と讀んだに對し、同じ漢式鏡中、副詞ではじまる確かな銘辭を示す遺品を見出して、その方面から此の場合新を國號とする見解を弱めることになつた事實である。

此の遺品は其の例が二面あつて、一は朝鮮の樂浪古墳の一から出土、いま平壤の中西嘉市氏の手にある盤龍獸帶鏡がそれであり、また他の一は支那出土の方格規矩四神鏡の簡単な一鏡に見る處で、其の遺品は京都の守屋孝藏氏が所蔵してゐる。前者の銘の全文を擧げると

此有佳鏡真大巧。上有仙人不知老。渴飲玉泉飢食棗。浮游天下憇三海

とあつて、「此に佳鏡あり」の句からはじまつてゐて、「新に大竟を作る」と全く同じ句法なのである。守

屋氏の一鏡また畧ば相似た銘文で、

此有佳鏡莫獨好。上有仙人不知老。渴飲禮泉飢啖棗。浮游天下留三海。

とある。而して二鏡共に後漢に其の製作年代を置く可きものなのである。

四

フリヤ美術館所蔵の大形鏡にはなほ一面の支那鑄造と認められる三角縁神獸鏡を見るが、同館の遺品で次に特記に値するのは口繪に示す張氏作神人畫象鏡である。本鏡はまた徑七寸五分を示す大形品であつて、面に一分内外の反りを示してゐる。鏡背文は完好な鈕を繞つて珠紋圈があり、内區四個の四葉座乳の間に畫象を容れたもの。車輿と舞樂圖との間に各々脇侍を伴ふ神人を配して、それが形の上から東王父西王母を表したものと認められる。圖像では車輿の形が面白く、琴を彈く婦人の前の小さな舞ふ人物の姿勢にも興がある。銘帶は蒲鉾形に近くて

龍氏作竟四夷服。多賀君家人民息。胡虜殄滅天下復。風雨時節五穀孰。官位尊顯蒙祿食。

なる整濟な銘を以てしてゐる。この銘は盤龍鏡に時に全然同一なものがある。一段高い外區の獸帶は繪畫的であるが、いま鏽の爲にその美しさを失つたのが惜しい。圖樣手法からして漢魏代の遺品とするに何人も異議がなからう。

此の鏡は前項に記した三者の如く日本出土とする明確な點はないが、其の良質の白銅が一部分鉛白の光澤を遺して、殆んど全部澤のない鏽で覆はれ、龜裂等を生じた點なご本邦出土鏡に見る特徴を具備し

たもの、而して構圖自體も日本出土支那鏡に其の例を存してゐる。

以上の類が私の觀た鏡のうち特に紹介したく思つた日本出土鏡であるが、いま本稿を終るに當つて從來知られた遺品のうち有名な傳仁德天皇陵出土のボストン博物館藏鏡に就いての實見の際の感想を附記したく思ふ。本鏡は徑七寸九分、緣厚三分七厘の大きな遺品であつて、四靈三瑞を配した獸帶の内側の銘帶に

青蓋作竟大毋傷。巧工刻之成文章。左龍右虎辟不羊。朱鳥玄武順陰陽。長保二親樂富昌。

の銘のあることは既に説かれてゐることであり、後漢から盛行し出した同式鏡として整つた構圖を示してゐるが、實物から受けた印象は、文様全體の表現が朦朧たる上に、質が白銅でなくて鉛色の勝つた銅色をして厚ぼい感じを與ふる處、同じ式の支那出土の精品に見ると著しく趣が違つてゐて、それの所謂再版物でないかを思はしめる。而して殆んど全面を覆ふ綠鏽の間に朱を點じ、また副葬に際してそれを包んだ布の迹の明に認められる點など、所傳の據る可きを思はしむると共に、それからこれが再版たることを肯定せられるとすると、其の國土の我が國であつたであらうことと想倒せしめるのである。